



ハトは、ひなをどのように世話しているの

ドバトは、駅、お寺、ビルなどに巣を作る

あちこちで、いちばんよく見かけるハトは、ドバトとよばれる種類です。町中にすむドバトは、駅、ビル、寺などの建物の、柱、屋根、のき下などや、すき間に巣を作ります。巣の材料には、ひもや針金、かれた小枝などを使っています。

野生のキジバトは、スギ林などの枝の上に、かれ枝を重ねて皿形の巣を作ります。

ハトは、ふつう、1回に卵を2個産み、1年に数回、卵を産みます。オスとメスが協力して、交代で卵をあたため、ひなも、オス、メスがいっしょに世話をして育てます。

親鳥の食物は、木の実、草の種、こく物などです。

ひなのえさは、ピジョンミルク

ハトの卵は、3週間ぐらいでかえります。生まれてから2週間ぐらいの間のハトのひなの食べ物は、特別なものです。オス、メス両方の親鳥から、栄養がたっぷりあるピジョンミルクというものを、もらうのです。ピジョンミルクは、親の胃の手前にある、食べた物を一時ためておく「そのう」で作られます。「そのう」の内側の、かべの細胞にたまった脂肪分が、はがれ落ちてできる、ミルクのようなものです。人間が、これに代わるものを作ることは、むりです。

卵からかえって3週間ぐらいすると、ハトのひなは、親と同じぐらいの体の大きさになります。こうなったら、えさも、親と同じ物を自分でつつくようになります。

(監修・今泉 忠明)

